

## 制服に着替え『君主論』を書くマキアヴェッリ

藤原 道夫

「百貨店 女性も制服なし 男女平等・多様性重視」こんな見出しを昨年末の新聞で見た。百貨店などでは、制服がなくなってゆくの時代の流れなのだろう。一方で、裁判官などは制服の着用が継続されるだろう。

制服といえば思い出す人物がいる。その名はニコロ・マキアヴェッリ（1469～1527）、ルネサンス盛期のフィレンツェに生きた男だ。

ニコロは 29 歳でフィレンツェ共和国第 2 書記局書記官に採用される。当時のイタリアは大小の共和国や君主国から成っていた。そこに教皇アレクサンデル 6 世の庶子チェーザレ・ボルジアが教皇領を拡大し、あげくにイタリアを統一する勢いで出てきた。彼はレオナルド・ダ・ヴィンチまで抱え込む。フィレンツェの政局は諸派が抗争に明け暮れていた。ニコロは祖国を守るために主として外交面の折衝に当たる。チェーザレともしばしば会見した。

1512 年メディチ家が再び政権を握るとニコロは書記局長官を解雇され、翌年には陰謀に加担した疑いで逮捕され、拷問にかけられた末に罰金を課される。フィレンツェでの生活基盤は失われてしまった。幸いキアンティと呼ばれる近郊に先祖伝来の農園があり、一家 7 人で移り住んだ。そこでの生活を、ローマ法王庁大使を勤める友人宛の手紙で述べている。これはイタリア文学史上最も有名で美しい手紙とされる。その要旨を以下に。

「日の出とともに起き、生計を立てるために森に出て仕事をする。一段落したところで泉に寄ってしばし本を読みながら休息。午後は旅籠で旅人話したりしながら過ごす。夕食の前後は近所の職人たちとワインを飲みながら賭博ゲームに熱中し、罵詈雑言が飛び交う中で過ごす。夜になると身を清めて書記官の制服に着替え、書斎の机に向かって 4 時間ほど執筆に没頭する。4 時間というもの、全く退屈を感じない。すべての苦悩は忘れ、貧乏も恐れなくなり、死への恐怖も感じなくなる。昔出遭った人々の世界に全身全霊で移り棲んでしまう。彼らとの対話を基に『君主論』をまとめている。これは新しい君主には受け入れられるだろう」

註。フィレンツェ書記官の制服：えんじ色の厚手のシャツに肩から踝上まである黒い袖なしガウンを羽織る

(次ページに続く)

『君主論』の中で述べている「君主に求められるのは力量と幸運と時代性だ」とする考えは、ニコロの卓越した洞察力を示している。有名な「結果さえよければ、手段は常に正当化される」は彼の考えというより、チエーザレのやり方をつぶさに観察して事実を述べたまで。

制服を着用すると職業意識に目覚め、高揚した気分になる。追放された身ながら、現役時代に着用していた制服に着替え、夜の静かな時間に自分の体験したことを振りかえりながら君主のあるべき姿をまとめていくマキアヴェッリ。これまで世界一安価な制服の白衣しか着たことのない自分にも、彼の心境はよく分かる気がする。いや、とても感動的に迫ってくるものがある。こんな気持ちを真に理解できる人たちが少なくならないことを願う。